

東大現代文解説

Anchor

平成28年度 第四問

収録

ver. 1.5



初めに.....	3
現代文とは何か？	3
Anchorとは何か？	3
この教材自体を疑うこと	4
議論すること	4
Anchorに関するお問い合わせ	5
平成28年度 第4問	7
解答例	7
本文解説.....	7
説明解説	12
設問（一）	12
設問（二）	17
設問（三）	28
設問（四）	35
最後に	42
引用文献・著作権表示.....	43

初めに

現代文とは何か？

受験科目としての現代文とは、与えられた文章（問題文）を、論理的に読解し、問題に対して適切な表現で応答する能力を測る科目である。実は東京大学もこの定義と同様の方針を表明している¹。この意味で、現代文という受験科目は非常に特殊なゲームであり、一般的な意味における「文章を読むこと」や「文章を書くこと」とは性質が異なるものだと考えて欲しい。それゆえ、ただ読書してみたり、ただ文章を書いてみても、現代文の点数はなかなか上がらない（もちろん、やらないよりはましであるが）。

この「与えられた文章（問題文）を、論理的に読解し、問題に対して適切な表現で応答する」という定義の要点は二つある。

一つは、必ず問題文に根拠を求めなければいけないということだ。言い換えれば、問題文に書かれていない専門知識だけを根拠とした読解をしたり、自分独自の主義主張を展開したりしても、それは全く評価されないということである。この点で、一般的な文章に対する論評とは異なる。また、問題文に根拠を求めるということは、筆者が何を伝えたいかに縛られる必要は無いということでもある。筆者が伝えようとはしていなかったが問題文に表現されてしまった事柄は読解する必要があるが、逆に筆者が伝えなかったが問題文で表現されていない事柄は無理に汲み取る必要は無い。私たちが対峙すべきはあくまで問題文であり、筆者ではない。

もう一つの要点は、論理的でなければいけないということだ。論理的に考えるだけが、現代文の妥当な解答へと向かう道である。そこに閃きや専門知識は全く必要無い。問題文に向き合い、丁寧に論理を重ねていけば必ず攻略できるはずだ。

Anchorとは何か？

この教材（Anchor）は東京大学の現代文の入学試験について解説しその解答例を提示しているものである。Anchorは大きく分けると、〈虎の巻〉と〈各年度問題解説〉から成り立っている。〈虎の巻〉では、各年度の問題に共通して通用する方法

¹ このことについてはこの章の最後にコラムとして記述している。

論について説明している。〈各年度問題解説〉では、各年度の問題について個別に解説し解答例を提示している。もちろん、可能な限り〈各年度問題解説〉だけを読んでも解説が成立するようには努めてはいるが、できるだけ〈虎の巻〉を参照してから、〈各年度問題解説〉を読むようにしてほしい。当たり前だが、実際に受験会場で対峙するのは、過去問ではなく未知の問題である。過去問を個別に対策しても、それは入学試験の対策をしたことには全くなならない。そして何より、将来の糧ともならない。過去問から何を学び、それを自分の力とすることが重要である。

この教材自体を疑うこと

多少逆説的に聞こえるかもしれないが、この教材自体を疑うことも非常に大事なことである。私たちはこの教材で解説を行い解答例を提示するが、私たちが言うことが全て絶対的に正しいわけではない。文章を読み解く方向性は必ずしも一つに収束しないし、また、同じ方向性においても、より緻密で精緻な読解・解答というのは常に存在し続ける。よって、この教材から学びつつ、同時にいつもこの教材を上回ることを目指すことが最も大切である。繰り返すが、実際に受験会場で対峙するのは、過去問ではなく未知の問題である。受験会場には普段教えてくれている先生はいないし、このAnchorも無い。自分自身の力でより良い解答を模索する気概と能力を身につけてくれたら嬉しい。

議論すること

受験問題自体、そしてこの教材の内容について議論することもとても大事だ。一人では見えなかったことも、他の人と議論する中で見えてくるものである。また、そもそも、先ほども述べた通り、読解の方向性は一様では無いのだから、様々な読みを認識すること自体が貴重な財産となるのである。実際、Anchorの執筆者も複数人おり、それぞれがつくった答案を突き合わせて、相互に批評しあいながらよいよい答案を練り上げてきた。

勿論、このAnchorを作った私たちに対する議論も歓迎である。可能な限り対応するので、いつでも気軽に議論を申し込んで欲しい。

ただし、読みには妥当性が必要であるということは注意として付け加えておきたい。読解の方向性は多様であり、また様々な人との議論が大切であるとは言っても、妥当性の低い読みというのはある。やはり、読み解く文章が指定されている以上、その文章の中に根拠があることが大事である。もちろん、論理性を欠いてもいけな

い。時折見られるような、解答に必要な要素をただ連ねただけで、論理のつながりを無視した文章もいけない。「現代文」という科目はそういうゲームなのである。読解は多様ではあるが、何でもありでは無い。多様性を認めつつ、妥当性を見極める力を身につけることが大切である。

Anchorに関するお問い合わせ

Anchorに関するお問い合わせは、 Webサイト、Twitter、LINE@にてお受けしております。

- ▶ Schip 公式Webサイト <https://schip.me>
- ▶ Twitter @schip__ https://twitter.com/schip__
- ▶ LINE@は以下のQRコードより友達登録をお願いします。



コラム：東京大学の考える「現代文」

東京大学がWebページで公開している「高等学校段階までの学習で身につけてほしいこと」という文章を読むことで、東京大学がどんな能力を測ろうとしているのかを推し量ることができる。そこでは「文章を筋道立てて読みとる読解力」「それを正しく明確な日本語によって表す表現力」の二つが中核として記述されている。このような東京大学の示す方針はAnchorにおける現代文の定義と相違ない。少し長くなるが、以下に全文を引用する。

(引用元：http://www.u-tokyo.ac.jp/stu03/e01_01_18_j.html)

(アクセス：2016年12月25日)

国語の入試問題は、「自国の歴史や文化に深い理解を示す」人材の育成という東京大学の教育理念に基づいて、高等学校までに培った国語の総合力を測ることを目的とし、文系・理系を問わず、現代文・古文・漢文という三分野すべてから出題されます。本学の教育・研究のすべてにわたって国語の能力が基盤となっていることは言をまちませんが、特に古典を必須としているのは、日本文化の歴史的形成への自覚を促し、真の教養を涵養するには古典が不可欠であると考えからです。このような観点から、問題文は論旨明快でありつつ、滋味深い、品格ある文章を厳選しています。学生が高等学校までの学習によって習得したものを基盤にしつつ、それに留まらず、自己の体験総体を媒介に考えることを求めているからです。本学に入学しようとする皆さんは、総合的な国語力を養うよう心掛けてください。

総合的な国語力の中心となるのは

1. 文章を筋道立てて読みとる読解力
2. それを正しく明確な日本語によって表す表現力

の二つであり、出題に当たっては、基本的な知識の習得は要求するものの、それは高等学校までの教育課程の範囲を出るものではなく、むしろ、それ以上に、自らの体験に基づいた主体的な国語の運用能力を重視します。

そのため、設問への解答は原則としてすべて記述式となっています。さらに、ある程度の長文によってまとめる能力を問う問題を必ず設けているのも、選択式の設問では測りがたい、国語による豊かな表現力を備えていることを期待するためです。(引用終わり)

平成28年度 第4問

堀江敏幸「青空の中和のあとで」

解答例

設問（一）	所謂天気予報を当てにすることは、天候の変化をその直前に予感し、日常の延長線上に非日常を見出すための機宜を逸することになるから。（63字）
設問（二）	知覚上にのみ存在する幻像である青が、内実は透明な物体である海や空の、平常時の言葉の上での概念を規定しているところ。（57字）
設問（三）	単調な日常の表面的な維持には、内心の暴発を平常は静止する一方で、その均衡を崩れる直前に潔く刷新することが必要だということ。（63字）
設問（四）	筆者の体験の質を高めていく日常の崩壊と再生の連鎖の一つとして、空の青は赤い風船という異なる非日常により呆気なく消散したということ。（65字）

本文解説

丁寧にエッセイの本文読解の虎の巻を適用しよう。そうすればだんだんとこの文章の輪郭ははっきりしていくはずだ。しかし、この文章はちょっと難しいのも事実だ。なぜなら、本文全体を通底するエッセイのテーマ（以下これを「全体テーマ」と呼びたい）が明確にどこかに書いてあるわけではないからだ。だから、単に記述を整理しただけでは、筆者の描く事柄がそれぞれバラバラのまま存在してしまっていて、それらの間の関係がわからなくなってしまい、とりとめのない読解しかできない。直接的に書かれていないながらも、各々の話題から全体テーマを想像し、今度はその全体テーマを元に各々の話題で言われていることと丁寧に解きほぐしていく必要がある（この読解の大まかな流れ自体はエッセイの読み方の基本なので、そこは見失わないでほしい）。

それでは以下、本文を頭から順に一緒に読解してみたい。

最初に述べられている話題は「青空」についてだ。第一段落には「私は十数分の非日常を、まぎれもない日常として生きた」とある。どうやら「非日常」とは悪天候のことであるようだ。とすれば「日常」は晴天であろう。そして筆者は「日常」と「非日常」の一体性・連続性を強調しているようだ。

では「日常」と「非日常」は完全に一緒のものなのか？第二段落を見ると、ちょっとそれは違うようだ。「平らかな空がいかにかりそめの状態であるのか」とあるように、「日常」はあくまで「かりそめ」であるようだ。「日常」と「非日常」は、仮初と内実の関係にあるようだ。

第二段落の最後から第五段落をまで見ると、筆者はその「非日常」を楽しみに待っているようだ。「非日常」である荒天は「ある種の救い」「一種の恩寵」をもたらす「ありがたい仕合わせ」であると表現している。ただ、第三段落の「破れ目」というのはどういうことか？よくわからない。そしてなぜ荒天がそんなに喜ばしいものなのか？第二段落には「不意打ちのように示してくれる」とある（傍点は解説者による・以下本問の解説では全て同様とする）。「日常」が仮初であることは筆者は示して欲しいということだ。しかし、なぜそれが有難いことなのかもまだちょっとわからない。これらについては、一旦保留。とりあえず次に進もう。

第六段落はこれまでの総括の様になっている。ここでも「崩れから回復までの流れを、予知や予報を介在させず、日々の延長のなかでとらえてみようとする」とも書かれていることから、やはり「日常」と「非日常」の一体性・連続性は大きなポイントでありそうだ。ここまでわかったことを表にしてみよう。

「日常」 = 「青空」 仮初の姿。	⇔	「非日常」 = 「荒天」 内実の姿
<ul style="list-style-type: none">・ あくまで「日常」と「非日常」は一体化・連続している。・ 「非日常」の現前は、「日常」が仮初であることを示してくれるという点で「ある種の救い」「一種の恩寵」をもたらす「ありがたい仕合わせ」である。		

二つ目の話題はどうやら「青色」についてであるようだ（なお、この箇所についての解説は設問(二)の項に詳しいので、ここでは大筋だけを述べる）。筆者は、「青色」は海のものにしても空のものにしても「幻」であるのだという。というのも、海の青は「手を沈めて水をすくったとたん」消えてしまう。一方で空の青は「いっ

たん空気中の分子につかまったあと放出された青い光の散乱にすぎない」「孤独な色」であり、「その色に、私たちは背伸びをしても手を届かせることができない」。確かに、海の実体は大量の水の運動であるし、空の青もまた、透明な空気中の光の反射という物理運動の結果である。そして、そのような物理運動は「重い現実」として自然災害時にのみ私たちの前に現前するのだ。このような青の様子は、「穏やかな表情を見せながらも弾かれつづける青の粒の運動を静止したひろがりとして示す」という意味において、「日常に似ている」のである。

「日常」と「青色」の関係が示された。「日常」は仮初で「青色」は「幻」である。この点は明らかに類似していると言える。そもそも、「日常」は「青空」だったのだから、ある種当たり前のことなのかもしれない。そして「日常」が「非日常」と連続しているように、「青色」は物理運動を抑圧しその上に成立している。共通性が見えてきた。ここまでの全体テーマはこんな感じだろうか？

<p>「日常」 = 「青空」 = 「青色」</p> <p>仮初・幻 穏やか 孤独</p>	<p>⇔</p>	<p>「非日常」 = 「荒天」 = 「物理運動」</p> <p>内実 抑圧されている</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ あくまで「日常」と「非日常」は一体化・連続している。 ・ 「非日常」の現前は、「日常」が仮初であることを示してくれるという点で「ある種の救い」「一種の恩寵」をもたらす「ありがたい仕合わせ」である。 		

三つ目の話題は「心」だ（なお、この箇所についての解説は設問(三)の項に詳しいので、ここでは大筋だけを述べる）。第十段落には「単調な日々を単調なまま過ごすには、ときに暴発的なエネルギーが必要になる。しかしその暴発は、あくまで自分の心のなかで静かに処分するものだから、表にあらわれでることはない」とある。

むむ、さっきの図式と似ている。「単調な日々」というのは、おそらく「日常」と同じことを指していそうだ。逆に隠れていて見えない「暴発的なエネルギー」は抑圧された運動である「非日常」のことだろう。そういえば、最初の話である「青空」における「非日常」も非常に荒々しいものだった。だとすると、「非日常」 = 「暴発的なエネルギー」は「日常」 = 「単調な日々」に「必要になる」というのも合点が行く。これらは一体化していたのだ。なお、これは勝手な推測になるが、この裏には「変わり続けられないものは無い」という思想があるように見える。万

物流転、諸行無常。この世では、変わらないことこそがありえないことなのだ。だとすると、本当に単調な日々というものもまたあり得ないはずだ。それはあるように見えるが、その裏に絶え間ない暴力的な運動性があるからである。筆者が伝えたいイメージはそんなことではなからうか。

続きを見ると「心の動きは外から見るかぎりどこまでも平坦である」とある。「日常」はあくまで穏やかなものであった。この点も類似している。そして次には「内壁が劣化し全体の均衡を崩す危険性があれば、気づいた瞬間に危ない壁を平然と剥ぎとる」とある。おそらく、「内壁」とは「単調な日々」と「暴発的なエネルギー」の境目にあるものだろう。ということは、この「内壁」は「日常」と「非日常」の間にもあるのだろうか？

そんなことを考えていたら、こう書いてあった。「そういう裏面のある日常とこの季節の乱脈な天候との相性は、案外いいのだ」。やはりどのモチーフもイメージは共有しているようだ。全体テーマを整理しよう。

<p>「日常」 = 「青空」 = 「青色」 = 「単調な日々」</p> <p>仮初・幻 穏やか 孤独</p>	<p>内 壁</p>	<p>「非日常」 = 「荒天」 = 「物理運動」 = 「暴発的なエネルギー」</p> <p>内実 抑圧されている</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ あくまで「日常」と「非日常」は一体化・連続している。 ・ 「非日常」は「日常」に必要であると言って良い。 ・ もし「日常」と「非日常」の均衡が崩れるようならば、その間の壁はむしろ一気に剥がしてしまうべきである。 ・ 「非日常」の現前は、「日常」が仮初であることを示してくれるという点で「ある種の救い」「一種の恩寵」をもたらす「ありがたい仕合わせ」である。 		

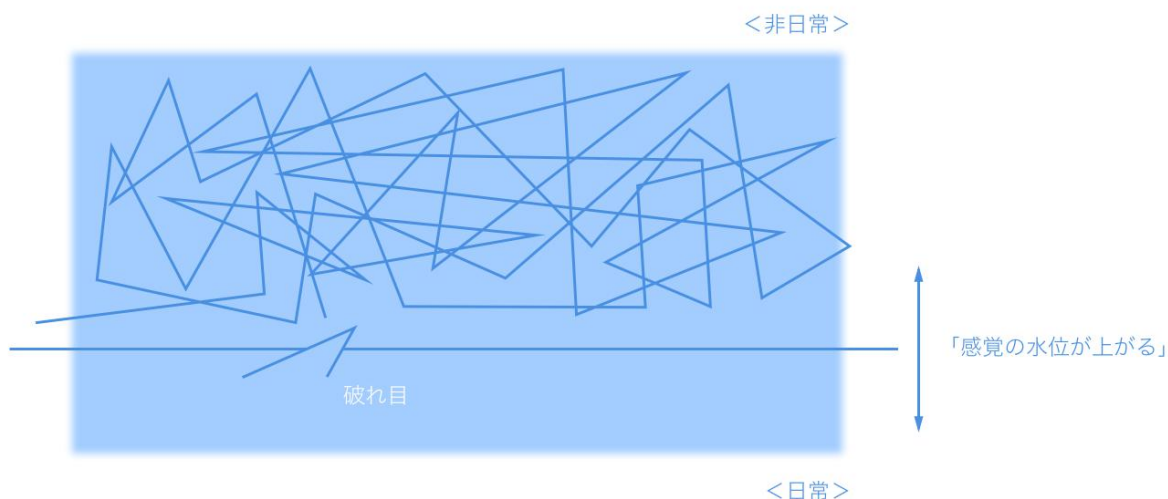
第十一段落には、ついに筆者が天候の急変を待ち望む理由も書いてあったみたいだ。「青空の急激な変化を待ち望むのは、見えるはずのない内側の崩れの兆しを、天地を結ぶ磁界のなかで一挙に中和するためでもある」とある。どうやら筆者は、目に見える悪天候に、目に見えない自分の内面の「暴発的なエネルギー」を投影することで、自分の心の中の均衡の崩壊を感じ取っていたのだ。それは、両者が同じ「非日常」の構図を共有しているから可能になる。そして均衡が崩れた時には、む

しろ間の壁は綺麗に取っ払ってしまおう。壁が消失した先にあるのは、両者の「中和」である。そしてそれこそが「ありがたい仕合わせ」である。

ここまで来ると、高度に比喩的で今まで謎に満ちていた筆者の言葉遣いも納得できるようになる。続く文には「この小さな変貌の断続的な繰り返しが体験の質を高め、破れ目を縫い直したあとでまた破るような、べつの出来事を呼び寄せるのだ」とある。二つの点が気になる。一つは「体験の質」だ。思えば第五段落に「日常の感覚の水位があがる」とあった。先ほど検討したように、悪天候を「非日常」として予感し、それに心模様を投影することで、結果的に心の不均衡を予知しているのだとすれば、これは同じことを述べていると考えられる。二つ目は、「破れ目」だ。第三段落にも、天候の急変は心に「破れ目」を作るとあった。心の中には「内壁」があり、それは不均衡の表れに応じて取りさらわれるのだ。だとすれば、これらの「破れ目」は「内壁」の中にあるのだろう。再び全体イメージをまとめよう。

<p>「日常」 = 「青空」 = 「青色」 = 「単調な日々」</p> <p>仮初・幻 穏やか 孤独</p>	<p>「内壁」 「水位」</p>	<p>「非日常」 = 「荒天」 = 「物理運動」 = 「暴発的なエネルギー」</p> <p>内実 抑圧されている</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ あくまで「日常」と「非日常」は一体化・連続している。 ・ 「非日常」は「日常」に必要であると言って良い。 ・ もし「日常」と「非日常」の均衡が崩れるようならば、その間の壁はむしろ一気に剥がしてしまうべきである。そうした心の「内壁」には「破れ目」ができる。 ・ そのような均衡の崩壊と再生によって、筆者自身に変貌し、体験の質は上がる。 ・ 「非日常」の現前は、「日常」が仮初であることを示してくれるという点で「ある種の救い」「一種の恩寵」をもたらす「ありがたい仕合わせ」である。 		

「水位」と「天地」というイメージがあるからには、「日常」と「非日常」の対比もまた上下の対比に捉えた方が良さそうだ。図にするとこんな感じになるだろう。



しかし、本文ではこれで終わりではない。最後の部分では、「赤い風船」がセンセーショナルなデビューを飾っている（この「赤い風船」の箇所については設問(四)の解説で詳しく述べる）。「貴重な青は、天を目指さない風船の赤に吸収され、空はこちらの視線といっしょに地上へと引き戻される」。どうやら「赤い風船」は「青空」のイメージを一掃してしまったようだ。確かに、「赤い風船」はこれまでの「青空」のイメージと全く異質である。そうして泰然と青を否定する赤い風船は、筆者の「青の明滅に日常の破れ目を待つという自負と願望があっさり消し去り」、そして筆者は「奇妙な喜びを感じつつ、茫然とした。」のであった。筆者の身には何が起きているのか？いや待て。思えば、「青の明滅に日常の破れ目を待つ」営みは、「この小さな変貌の断続的な繰り返しが体験の質を高め、破れ目を縫い直したあとでまた破るような、べつの出来事を呼び寄せる」のであった。きっと筆者はこの「断続的な繰り返し」のサイクルを回し続けるのであろう。そして文章はこう締めくくられたのだった。「再び失われた青の行方を告げるように、遠く、雷鳴が響いていた」。

説明解説

設問（一）

問題

「何かひどく損をした気さえする」（傍線部ア）とあるが、なぜそういう気がするのか、説明せよ。

解答例

所謂天気予報を当てにすることは、天候の変化をその直前に予感し、日常の延長線上に非日常を見出すための機宜を逸することになるから。(63字)

構成フェーズ

- ・ 設問文読解
- ・ 傍線部読解

読解フェーズ

思考の目次

- ・ 「損」とは何か？何が失われたのか？
- ・ なぜ「損」をしたのか？
- ・ 「損」より軽度な何らかの被害は何か？

表現フェーズ

構成フェーズ

設問に「なぜそういう気がするのか、説明せよ」とある。「そういう気」とは筆者の考えなので、「筆者がなぜそう考えるのか」について回答する必要があることがわかる。よって、回答すべきその理由は、筆者の主観的で個人的な感じ方であって良いが、一方で読み手の常識や推察はいつも以上に注意して排除するべきであろう。

次に傍線部を見る。主眼は「損」であろう。「損」とはどういうことだろうか？言葉の意味としては、損とは「少なくしてしまうこと」「壊してしまうこと」である。失われたものが何か、そしてどうして失われたのかをはっきりさせることが重要だ。また、「気さへする」という累加の表現も使われているので、「損」をすることより軽度な何かと比較することも必要だ。よって、読解フェーズで考えるべきは以下の問いだ。

- ・ 「損」とは何か？何が失われたのか？
- ・ なぜ「損」をしたのか？
- ・ 「さへ」という言葉のニュアンスは何か？

読解フェーズ

傍線部の直前を見れば、なぜ「損」をしたのかはすぐにわかる。「すれちがいざま、これから降るらしいよといった会話を耳に挟んだりすると」とあるので、このような天気予報が「損」の原因である。

それでは直接「損」とは何かを突き止めようとしたいが、ちょっと難しい。そこで、「さえ」という言葉で「損」をすることと比較されている何かが、「損」をすることの意味の重大なヒントになると思われるので、そこから考えてみる。傍線部の直前の文に「予報は、ときに、こちらの行動を縛り、息苦しくする」とある。これは「損」をするより軽度な被害であると言える。ここまでを踏まえると、天気予報により、「行動を縛り、息苦しく」されるだけでなく、「損」すらもしてしまうというのが、傍線部の意味であることがわかる。

よって、次になぜ天気予報が「損」を生むのかを考えれば良い。手がかりを探すためにさらに前を遡ると、「なにかが起こってから、あれはよい意味での虫の知らせだったとするのはどこか不自然なのだ」とある。筆者は「よい意味での虫の知らせだったとする」ことに否定的だ。なぜか？そのさらに前には「自分のアンテナを通じて入ってきた瞬間にそれが現実の出来事として生起する、つまり予感とほとんど時差のない一つの体験であって」とある。その話題は「破れ目につながる日々の感覚」であり、「破れ目」とは悪天候が生み出すものである。つまり、人間は本来「予感」によって事象を同時間的に直前に感覚するものだというのが筆者の主張であるらしい。だから「よい意味での虫の知らせだったとする」ことに否定的だったのだ。

ここまでをまとめると、傍線部の意味は、天気予報により、「行動を縛り、息苦しく」されるだけでなく、「予感」によって事象を同時間的に直前に感覚する人間の本来の感覚すらもしてしまうということであることがわかる。確かに、天気予報とは、事象が起きるだいぶ前に知るものである。

しかしここで、もう一步深く疑問を持って欲しい。「予感」を失うことは、なぜ損失なのだろうか？言い換えれば「予感」にはどんな価値があったのだろうか？「損」が単に人間が自らの感覚を失うことだけを意味するのであれば、「損」と「行動を縛り、息苦しく」こととの間の違いはあまりはっきりしない。この問いのヒントとなるのは、傍線部の後に書いてある。筆者は、荒天を「一瞬の、ありがたい仕合わせと見なし、空の青みの再生に至る契機を、一種の恩寵として受けとめ」ている。そして、これはなぜなら、「崩れから回復までの流れを、予知や予報を介在させず、日々の延長のなかでとらえてみようとする」ことで、「非日常を、まぎれもない日常として生きる」[第一段落]ことができるからだ（この箇所は本文全体に関わることなので、適宜本文解説も参照して欲しい）。逆に言えば、「予報」によって

事前に荒天という非日常を知ってしまうことは、本来日常と背中合わせにあるはずの非日常を、日常から引き剥がすことになる。これらのことを踏まえて、解答を書いてみよう。ここではまだ字数は気にしない。

天候の変化を事前に知らせる予報を当てにすることは、人間が本来持っているはずの、自分自身の感覚で天候の変化を直前に予感する能力を失わせ、日常の延長に非日常を見出すための好機を逸することにつながるから。(98字)

表現フェーズ

文章構成を劇的に変えることは難しそうなので、重要度の低い語を削っていく。「天候の変化を事前に知らせる予報」は、「天気予報」と言っても、その事前性が強調はされなくなるが大きな問題はない。また、「予感を失わせ、好機を逸する」では長いので、重要度の低い「予感を失わせる」方は簡略化する。「感覚」だとか「能力」だとかいうここでは似た意味となる言葉もまとめてしまおう。

所謂天気予報を当てにすることは、天候の変化をその直前に予感し、日常の延長線上に非日常を見出すための機宜を逸することになるから。(63字)

他社解答例の講評

A社

答案 単調な日常に突然現れる天候の崩れを非日常の恩寵と受け止める筆者にとって、予報はその貴重な機会を奪うものだから。(55字)

Schip採点 4点 読解点：2点 構成点：1点 表現点：1点

なぜ「日常に突然現れる天候の崩れ」が「非日常の恩寵」なのかについて説明が不十分だ。この説明が無いと、なぜ「貴重」なのかが不明瞭なままである。人間は「日常」の延長線上にある「非日常」ほぼ同時間的に非日常を予感することができるはずなので、「日常に突然現れる天候の崩れ」の到来を予感することが貴重な機会なのである。よって、構成点は減点された。

B社

答案 日常の中で青空の突然の崩れが与えてくれる非日常の恩寵を、予報は自分を束縛する既定の出来事へと解消してしまうから。(56字)

Schip採点 2点 読解点：0点 構成点：2点 表現点：0点

構成としては良いが、読解の内容としては二つ問題点がある。第一に「非日常の恩寵」では曖昧すぎて説明になっていないだろう。少なくとも日常と非日常の連続性について触れるべきである。第二に、予報が非日常の恩寵を「既定の出来事」にする点が「損」の本質だとすれば、失われたのは非日常の“未定性”だということになる。これは本文の主旨とずれている。重要なのは未定か既定かではなく、筆者が自身でそれを予感できるかどうかである。もし「既定」を“予感可能性”と同一視するならば、それは「事象の確定はそれを認識する側が決める」という前提が必要だが、その前提は答案に表現されていないし、本文にも述べられていない。よってこれは誤りであると言える。これらの問題点により、読解点は0点である。

C社

答案 天候の崩れを、日常感覚の中で突然感じる瞬間があつてこそ、非日常的な恩寵が感じられるのであって、自己を束縛する予報はそうした契機を奪うものだから。(72字)

Schip採点 3点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：0点

<予感>の要点は同時的でありつつもあくまで直前に感じることであり、「突然」感じるかどうかではない。この点で読解点を減点した。日常と非日常の連続性についてもできれば明言したいところであった。

D社

答案 夏の青空が急変し、その後鮮やかな回復へと向かう一連の流れという非日常的出来事を、日常の延長のなかで捉えようとする感覚が、予報を介しては得られないから。(75字)

夏の青空が急変し、その後鮮やかな回復へと向かう一連の流れという非日常的出来事を、日常の延長のなかで捉えようとする感覚が、予報を知ること束縛されてしまうから。(79字)

Schip採点 3点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：-1点

字数が多すぎるため表現点が減点される。「予感」が現象の直前に行われることを明示した方が、予報－予感の対比と「予報を介して得られない」理由を明確化できるという点で望ましいが、減点はされない程度かもしれない。

E社

答案	平凡な日常の中に突如訪れる不穏な予感と急激な非日常の世界を自ら体感する貴重な機会を、他者の予報によって奪われたと感じたから。(63字)
Schip採点	2点 読解点：2点 構成点：0点 表現点：0点

まず答案の着地が致命的に間違っている。この答案と設問を繋ぎ合わせて、設問で必要とされている形式の論理を構成すると、「奪われたと感じたから損をした気がする」となる。全く説明になっていない。「奪われたと感じた」ことは「損をした」ことと同じことを指示しているので、理由を説明したことにはならない。この点で構成点は加点されない。また、減点対象とはならないかもしれないが、A社やC社の解答と同様、なぜ「貴重」なのかについてより説明して欲しかった。

F社

答案	青空の崩れは突然生じてこそ非日常の感覚をもたらしてくれるのであり、情報を与えられていたのではその体験の新鮮さが失われるから。(63字)
Schip採点	2点 読解点：0点 構成点：2点 表現点：0点

「予感」することが貴重な機会であるのは、それが新鮮であるからではない。これはこの設問で最も重要な点であるので、読解点は加算されない。

設問 (二)

問題	「青は不思議な色である」(傍線部イ)とあるが、青のどういうところが不思議なのか、説明せよ。
解答例	知覚上にのみ存在する幻像である青が、内実は透明な物体である海や空の、平常時の言葉の上での概念を規定しているところ。(57字)

構成フェーズ

- 設問文読解
- 二種類の「青」

読解フェーズ

思考の目次

- 「海の青」の性質は何か？
- 「空の青」の性質は何か？
- 「海の青」と「空の青」の性質を統合して一般化するとどんな性質が見出させるか？
- 「空の属性」とは何か？
- 「青」の性質の中のどこに逆説性があるか？
- 【発展】「重い現実」とは？
- 【発展】「青」の性質と本文全体の趣旨との関係は？

構成フェーズ

設問文を見よう。「青のどういうところが不思議なのか、説明せよ」とある。ここでのポイントは二つだ。一つは、主題が「青」に限定されているところ、もう一つは、不思議さを説明することが求められているところだ。不思議さの説明には、大抵の場合は逆説が必要だ。よってここまでの設問文の確認によって、逆説的な「青」の性質を探るのがこの設問の基本戦略であることがわかる。そして、本問の場合は、設問文に傍線部自体の内容も書かれてしまっているため、傍線部読解は割愛する。

本文には二種類の「青」が挙げられていたことには注意しなければならない。傍線部直後にある「海の青」と、続く第八・第九段落にて述べられている「空の青」である。設問で「青」としか指定されていない以上、これらの両方を考慮すべきだ。よって、この二つの「青」の性質を一般化して統合することが望ましい（もちろん、もしそれが不可能そうであったら、仕方ないのでそれぞれの性質を別個に述べることになる）。

よってここまでを踏まえて、読解フェーズでは以下の問いを検討していくことにしよう。

- ・ 「海の青」の性質は何か？
- ・ 「空の青」の性質は何か？
- ・ 「海の青」と「空の青」の性質を統合して一般化するとどんな性質が見出されるか？
- ・ 「青」の性質の中のどこに逆説性があるか？

読解フェーズ

この読解は最高レベルに難しい。文章全体との関係性が見えにくい上に、断片的な比喻をつなぎ合わせる必要があるからだ。論理を単純に繋げばそれで終わりとはならない。なので、根気よくわかることを文章から拾い、そこに少しの想像力を足して読み解いていこう。というわけで、まずは本文の手がかりを拾っていくことから始める。

筆者は、「海の青」は「幻」だと言う。幻だということは、言葉の意味からして、実際には無いのにそう見えてしまうということだろう。筆者はその理由を「手を沈めて水をすくった途端青でなくなる」からだと言う。少し想像してみよう。海岸で海の水を掬って見る。するとそれはきっと、透明であろう。言われてみれば当たり前のことだ。ここまでをまとめると、(A-1) 「幻」とは「実際には透明なのに青色に見えてしまう」ということになる。（後に参照するために傍線部にした。）

続きを見る。「海は極端に色を変えた時、幻を重い現実に変える力を持つ」。これは何のことだろう。完全に想像になるが、海の「重い現実」という言葉から連想されるのは、海難事故や津波などだろう。ただし、これはあくまで勝手な想像に過ぎない。確実にわかることは(B-1) 「幻」と「(重い)現実」が対比される概念であることだ。

「重い現実」の意味については、一旦保留して次の文を見る。次の文には、「海の青」への「怖れ」と「愛」が述べられているが、これもまた難しい。先ほどの「重い現実」のイメージと総合すると、何となく、危険と隣り合わせながらも海に生きる男の姿が浮かんできそう。だがこれもあくまで勝手な想像だ。現代文というゲームにおいてはあまり役立たない。これも保留しておこう。

では、「空の青」について見てみよう。これもまた「幻」であるようだ。その理由は、筆者によれば、空の青は、大気中の光の散乱の中で、そのごく一部にすぎない青色の散乱のみが残った結果であるからだ。この「幻」の性質は、「海の青」と同じであろう。「空の青」も結局は青色になる波長を持った光の散乱なのだ。光自

体に色は無い。次の文はこうだ。「私たちは背伸びをしても手を届かせることができない」。空の青色は掴むことは絶対にできない。その波長の光が青色に見えるのは、人間の知覚がそうなっているからでしかないからだ。人間の知覚のシステムが私たちにそう見させていると言って良いだろう。その意味で(A-2)「青色」は私たちの知覚の中にしかないのだ。だからそこに物体として到達することができない。

続く第九段落を見てみよう。まず、空は「当たり前のように遠い」とされる。空は遠くにあるのが当たり前だということだ。どういうことだろうか？ 次の文を見ると意味がわかる。「飛行機で空を飛んだら、それは近すぎてもう空の属性を失ってしまう」と述べられている。飛行機という具体場面の例示は、「海の青」で言うところの掬い上げる場合の話と同じであろう。今までの議論の通りだ。ここで注目すべきは、「空の属性」の話である。「空の属性」とは何か？ 「空の属性」があるのは、きっと「当たり前のように遠い」時なのだろう。その意味で、「遠く眺めて、はじめてその乱反射の幻が生きる」のだと筆者は言う。この箇所を図式化すると、どうやら二項対立になりそうだ。(B-2)少しアバウトに等式関係で繋ぐと、以下のようになる。

- 「遠い時」 = 「当たり前」 = 「空の属性」がある = 「幻」
- 「近い時」 = 「 ? 」 = 「空の属性」は失われている = 「？」

さて、これで手がかりが出揃った。これまで出た手がかりをまとめ、できれば統合していきたい。尚、以下の(A-1)と(B-1)は「海の青」の描写からわかったこと、(A-2)と(B-2)は「空の青」の描写からわかったことである。

- (A-1)「幻」とは「実際には透明なのに青色に見えてしまう」ということ。
- (A-2)「青色」は私たちの知覚の中にしかない。
- (B-1)「幻」と「(重い)現実」が対比される概念である。
- (B-2)「遠い時」と「近い時」の対比の図式がある。

(A-1)と(A-2)はそのまま統合できそう。すると「幻」とは何かわかる。「幻」とは「実際には透明なのに青色に見えてしまうことであり、その意味でその青色は私たちの知覚の中にしかない」ということである。そして、(B-1)と(B-2)もまた統合できそうである。なぜなら、(B-2)の図式の中で、「遠い時」 = 「幻」という（アバウトな）等式関係があったからである。統合すると、(B-2)の最後の「？」を埋めることができる。

- 「遠い時」 = 「当たり前」 = 「空の属性」がある = 「幻」

- ・ 「近い時」 = 「 ? 」 = 「空の属性」は失われている = 「現実」

この対比関係をよくみると、(A-1)と(A-2)を統合してわかった「幻」の定義と、(B-1)と(B-2)を統合してわかった対比の図式も統合できそうだ。なぜなら、後者の図式に「幻」は含まれているのだから。横に並べると長くなりすぎるので、表にして整理してみよう。

「遠い時」	「近い時」
「当たり前」	
「空の属性」がある	「空の属性」は失われている
「幻」	「現実」
私たちの知覚の中にしかない青色である 実際には透明なのに青色に見えてしまう	

最後の「実際には透明なのに」というのは、この対比の図式の中で処理可能だろう。「実際には〇〇である」ということは、その性質は対比されている相手に包含されるべきであるはずだ。

(海や空の)「遠い時」	(海や空の)「近い時」
「当たり前」	
「空の属性」がある	「空の属性」は失われている
「幻」	「現実」
私たちの知覚の中にしかない青色	実際には透明である

多少アバウトな等式関係を元に図式を作ってきたものの、結果として妥当な図式が完成した。さて、最終的に私たちが取り組むべき問いは、「青」の性質の中にどんな逆説性があるかであった。よって、それを検討するには、この図式も「青」を中心に組み直すべきだろう。

「青色」	透明
「幻」	「現実」
(海や空の)「遠い時」 「空の属性」がある	(海や空の)「近い時」 「空の属性」は失われている
「当たり前」	
私たちの知覚の中にしかない	

青の性質のどんなところが逆説的なのか、少しずつ見えてこようとしているが、まだ完全にはつかみきれない。なので、もう少しこの図式の中身について考えてみたい。そもそも、「空の属性」があるとはどういうことか？「属性」とはそのまますべて「そのものに属する性質」ということだ。ということは、「空の属性」が何かから無くなるということは、そのものから「空」という性質が無くなるということだ。それはつまり「空」では無くなるということだと言って差し支えないだろう。つまり、遠くから眺めるとそれは「空」であるが、近くから眺めると其の其れは「空」ではないということだ。紛らわしくなったが、本文に挙げられている飛行機の実例を考えれば簡単にわかる。飛行機で窓から見るとその空間は、地上から見た時の「空」だ。航空会社が提供するの「空の旅」である。しかし、飛行機から窓の外を見て、「横に空があるね」と言ったら、少し違和感がある。その時横にあるのは「空」ではなく「空気」とか「大気」とかであると考えの方がまだ自然だろう。地上から見た時「空」であるそのものは、近くで見ると「空」ではなく「空気」であるということだ。同じことが「海」にも言える。「海」に行く。「海」岸に立つ。あなたは「海」の「水」を掬う。掬ったそれを何と呼ぶか。おそらく「水」であろう。譲歩しても「海水」、あくまで「水」の範疇だ。「ねえ見て、海を掬ったよ」と言ったら、あまりに詩的ではないか！

これを読んだあなたは今「言われてみれば不思議だなあ」と思ったのではないか。初めてこれに気づいた私たちもそう思った。そして、設問で求められていたのはまさにそれなのだ。ここに設問の中核がある。不思議なのは、海や空は、実際には透明な「水」や「空気」であるにもかかわらず、「幻」である「青色」こそが、それらを「海」や「空」たらしめていることなのだ。

ここまでで、答案の概略は掴めた。ただし、設問は「青のどういうところが不思議なのか」説明することだったことを忘れないようにしたい。上記の「海」と「空」と「水」と「空気」の不思議な関係を、「青」を主役に書いてみよう。

青は、「幻」であるにも関わらず、実際には透明な水や空気である海や空を、「海」や「空」たらしめているところ。(53字)

中核は抑えたが、説明不十分な点が三つある。第一には「幻」の説明が不十分な点、第二に「水や空気である」の箇所が一般化されていない点、そして最後に「『海』や『空』たらしめる」の説明が不十分な点である。

「幻」は「実際には透明なのに青色に見えてしまうことであり、その意味でその青色は私たちの知覚の中にしかない」ということだった。前半部は答案に既に示さ

れているので、後半部だけを盛り込めば大丈夫だ。「幻」という言葉のニュアンスは保存するために、より明確に幻像(もしくは幻影でも良い)という言葉を加える。

青は、人間の知覚の中にしかない幻像であるにも関わらず、実際には透明な水や空気である海や空を、「海」や「空」たらしめているところ。(64字)

次に「水や空気である」の箇所を一般化したい。ここを一般化しないと、単なるそれは描写に過ぎないように見えてしまう。知覚の中にしかない「幻」と対比されているのが重要であるので、先ほどの図式で言う「現実」をうまく表現したい。ここでは、「物体」や「物理現象」もしくは「実在論的」などの言葉で表現するのが良いだろう。本文中に光の反射の話が述べられていことや、後者が徒らに哲学的であることを踏まえて、ここでは前者の「物体」や「物理現象」という言葉を使うことにした。参考までに、答案の下に先ほどの図式を更新したものも載せておく。

青は、人間の知覚の中にしかない幻像であるにも関わらず、実際には透明な物体である海や空を、「海」や「空」たらしめているところ。(62字)

「青色」	透明
「幻」	「現実」
(海や空の)「遠い時」 「空の属性」がある	(海や空の)「近い時」 「空の属性」は失われている
「当たり前」	
私たちの知覚の中にしかない	実在論的な物理現象

「『海』や『空』たらしめる」については、先ほどの「属性」についての議論をもう少し検討してみたい。遠くで見るか近くで見るかによって、つまり「青色」であるかによって、それが「海」や「空」であるかが変わってしまうということのおもしろさは、内実としては同じ物体・物理現象であることだ。内実としては同じなのに、見え方感じ方によって「海」や「空」と呼ぶかどうかが変わってしまうのである。つまり、「海」や「空」は、あくまで言葉の上にもみ存在する概念であるということなのだ。対応する確固たる事物が存在しているように思ってしまうこのような「海」や「空」という言葉も、実は言葉の上にもみ存在する概念という側面を持っていることを示しているのが筆者の文章のおもしろところだ。さて、これを踏まえると、答案の「『海』や『空』たらしめる」については、これらがあくまで言葉の上での話であるということを強調したい。ここまで全てを踏まえると、以下の答案が完成する。

青は、人間の知覚の中にしかない幻像であるにも関わらず、内実は透明な物体である海や空の、言葉の上での概念を規定しているところ。(59字)

ほぼ満点だ。ただ、まだ二つ改善点がある。以下に述べることは、これまでの一直線的な議論の中からは導かれないし、考える労力の割には、点数にならないかもしれない。なので発展課題だと思って見て欲しい。

まず最初の論点。これまでに触れてきたことの中で、保留してあったことが二つある。一つは、「海は極端に色を変えた時、幻を重い現実に変える力を持つ」こと、もう一つは、「海の青を離れるのは、それを愛するのと同程度に厳しい」ということである。前者についてはこれまでの議論を元に考察の余地がある²。「現実」とは海や空の物理現象的側面であった。では、青が「極端に色を変えた時」の「重い現実」とは何のことか？「重い」にも様々な意味があるが、「深刻である」という意味にとってみよう。すると、「重い現実」とは、言わば深刻な物理現象としての海や空のことを指すことになる。ここまで来ると、「重い現実」を津波や台風などの自然災害と結びつけることも妥当な連想だと言って良いだろう。遠くから眺めると「海」であり、近づいて触れると途端に「水」になってしまう海が、津波として目の前に現れた時はどうだろうか？人々はそれを「海が襲ってきた」と感じるだろう。遠くから眺めると「空」であり、飛行機で横から見ると「空気」になってしまう空が、暴風雨として自分の家を吹き飛ばしたらどうだろうか？少なくとも人々はそれを「空気の反乱」とは言わないはずだ。強いて言えば「空が暴れている」という感じだろうか。よって、空や海は、これまでの議論で見たいように、遠くに見る時の「幻」の「青」がその意味を定義していて、近づくと「海」や「空」ではなくなるはずののだが、一方で深刻な物理現象(=自然災害)として現象した際には、あくまで「海」や「空」に戻るのである。その色が濁っているとしても、である³。これもまた不思議なことだ。実は「青」の不思議さには二重の逆説があったのである。よって、答案にも「平常」と「緊急時(災害時)」の対比を入れてみよう。

青は、人間の知覚の中にしかない幻像であるにも関わらず、内実は透明な物体である海や空の、平常の言葉の上での概念を規定しているところ。(65字)

さて、もう一つの発展的な論点についても考えてみたい。それは、この「不思議な色」としての「青」がこの文章全体の趣旨(本文解説で述べた「全体テーマ」)の中でどう位置付けられるか、という点である。この文章の全体テーマは、要する

² 後者については私たちは結局読み解けていない。無念！ぜひ筆者と語り合わせていただきたいものだ。

³ こうして考えると、「夕焼け空」は遠くて赤いが「空」である。興味深い。

に「日常」と「非日常」の対比であった。「不思議な色」としての「青」にこの対比はどう当てはまるか？これを考える上では、「青色」と透明の図式の中に取り残されていた「当たり前」と、先ほどの「重い現実」の議論が参考になるだろう。つまり、「幻」が「空」や「海」の概念を規定しているのは、あくまで「当たり前」の状況＝「日常」においてのみであるのだ。なぜなら、先ほど検討した通り、「重い現実」という「非日常」が現れ出た時、「空」や「海」の概念を規定しているのは物理現象としての側面だからである。先ほどの答案での「平常」という概念の導入はおそらく正解であったことが窺える。なので、少し文章をスッキリさせたものを解答例とした。最後にこの対比を、先ほどの図式に当てはめてまとめてみよう。

「青色」	透明
「幻」	「現実」
私たちの知覚の中にしかない	实在論的な物理現象
「日常」＝「当たり前」に「遠い時」に時において、「海」や「空」の言葉の上での概念を規定する	「非日常」＝自然災害などの時において、「海」や「空」の言葉の上での概念を規定する

他社解答例の講評

A社

答案	海の青であれ空の青であれ、平凡で穏やかな表情を見せる幻の色でありながら、内に激しいエネルギーを秘めているところ。(56字)
Schip採点	0点 読解点：0点 構成点：0点 表現点：0点

「青は穏やかなのに激しいところが不思議である」と主張する答案である。しかし、「穏やかなのに激しい」ことを不思議さと結びつける積極的な根拠はない。本文に「空の青こそが、いちばん平凡でいちばん種やかな表情を見せながら、(中略)日常に似ているのではないか。」とあるが、この文から「穏やかなのに激しい」ことが「青」と「日常」の類似点であることは読み取れても、それが「青」自体の不思議さの中核であることを読み取ることはできない。読解フェーズで解説した通り、傍線部をその直後の文章から順に丁寧に検討していけば、穏やかさと激しさという日常と非日常の対比は、あくまで青の不思議さの構図の中の一部でしかないことがわかるだろう。「いつも遠い。(中略)空の属性を失っている」という文章を無視してはいけない。よって構成点は零点である。読解の要点である「幻」の説明も不十分であるので、読解点も辛うじて一点残るかどうかが、そんなところであろう。

B社

答案	遠く手の届かない隔たりが生み出す幻である一方、激しい力を内にはらみ持ちつつ平穏な表情を孤独なひろがりとして示すところ。(59字)
Schip採点	0点 読解点：0点 構成点：0点 表現点：0点

この答案では二つの対比が描かれている。「幻」であることと激しさを内包しながら「平穏な表情を孤独なひろがりとして示す」ことの対比が一つで、さらに、激しさと「平穏な表情」もまた対比されている。まず第一の対比については、「幻」であることと激しさを内包しながら「平穏な表情を孤独なひろがりとして示す」ことの両立は、本文を読んでも不思議であることが自明ではないので、もしそれを不思議さの要点だとするならば、答案の中でその理由を説明する必要があるだろう。次に第二の対比については、A社の解答の講評で解説した通り、穏やかさと激しさの対比は、青の日常との類似点ではあれど、青の不思議さの中核ではない。よって、この答案も、不思議さについて全く説明できていないと言える。構成点は零点だ。また、「幻」の本質を単に「隔たり」だとしてしまっている点も読解不足である。読解の面でも、部分点を加点する要素は見当たらない。

C社

答案	海の青は重い現実を抱えつつ、すくえば消える幻の色であり、空の青も不穏な変化の可能性を秘めつつ、他の色から孤立した、人の手の届かない幻の色だということ。(75字)
Schip採点	0点 読解点：0点 構成点：0点 表現点：0点

この答案の骨子は、「幻の色であるところが青の不思議なところ」だということである。これは本文の内容とずれている。構成点は与えられない。また、読解点の加点要素も見当たらない。

D社

答案	近づきすぎると見失われ、遠くから眺めてはじめてとらえられる色や運動性を備え、感情をもたらす対象として感覚できない、手の届かない幻としてあるところ。(73字)
Schip採点	0点 読解点：0点 構成点：0点 表現点：0点

まず、C社の答案と同様、「幻であることが不思議だ」というのは本文に積極的な根拠が見出せない主張である。構成点は与えられない。また、読解の面では、「幻」の本質を単に距離感としている点は読解不足である。また、「感情」という要素はおそらく「海の青を離れるのは、それを愛するのと同程度に厳しいことなの

コラム：言葉と概念と規定とあなた

この設問の読解フェーズでの議論は、概念の本質は何か、平たく言えば「それをそれたらしめているものは何か？」という問いに直結している。これは哲学でも古くから議論されてきた問いだ。例えば、この問いの答え方の一つの方向性として、この本文とも近いものと言うと、本質はその概念の客観的性質の中にあるという考え方ができる。さらに本文にあった「属性」という言葉に絡めて言えば、实在論という哲学の分野において、アリストテレス以来、「属性(attribute)」と「性質(property)」という区別がされることがある。前者は本質を定義する性質であり、後者は別に欠けてても良い性質のことを指す。これは本文での「属性」の意味とほぼ同じであると考えて良いだろう。もちろん、「いや、どの性質も何かの本質を規定するのには必要なのだ」とか、「何かの本質は、客観的な指標では決まらない」とか、違った考え方をすることも可能だ。興味があったら考えてみてほしい。

言葉と概念の関係も、この本文の議論に深く関わる論点だ。まさにこの設問の「青の不思議なところ」が指摘する様に、結局私たちは何事も言葉によって表現することが多いので、もはや何事も言葉によって規定されているのではないかと思えるところがある。このことについての問いを最初にちゃんと立てたのは、フェルディナン・ド・ソシュールとルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインである。ソシュールは、言葉で指示される概念は差異によってのみ支えられているとした。わかりにくいので例を出そう。「机」と「椅子」の二つは全く違う概念に思える。しかし、例えば、ちょうど座れそうでも物書きができそうでもある高さで、かつ背もたれが無い四本足の台が何の説明もなく置いてあったとする。あなたはそれを何と呼ぶか？ここで言いたいのは、「机」と「椅子」も、物体の上での明確な線引きはできないということだ。その意味で、「椅子」とは、「四本足の台」界の中の「机」ではないものなのであり、逆に「机」は「椅子」ではないものでしかないのだ。もしかしたら、ある言語では「机」「椅子」という言葉は無く、「台に座る」とか「台で書く」とか言っているかもしれない。こうして考えると、あれ、概念に言葉が当て振られているのか、それとも言葉に概念が当て振られているのか、わからなくなってきたのではないか？実はこんな議論も全て吹っ飛ばしてしまうのがウィトゲンシュタインである。彼が問いに立てたことは、「結局どんな抽象的な概念について言葉で議論しても、それって『その言葉で示したその概念』でしかなくて、『その概念』そのものじゃないよね？じゃ、『その概念』について議論するのって無理じゃね？」ということである。例えば私は「美」について語りたい。しかし「美」について何を語ったところで、それは「『美』という言葉で表された何か」でしかなくて、それは素晴らしい絵画を見たとき心の中に浮かぶあの【美】ではあり得ないのだ。何と悲しいことか。しかし、これに反論するのはかなり難しい。なぜなら、この文章自体も、何を言おうと所詮は「言葉で示されたそれ」でしかないのだ。仕方ない、だとしたら、唐突だが、ここで筆を置くしかない様だ。

だ」という文に由来するのだろうが、そこからなぜ「青」が「感情をもたらす対象として感覚できない」ものになるのかは不明である。読解点も与えられない。

E社

答案	人が直接触れることのできない遠さや孤独を感じさせるとともに、その背後に現実を変える大きな力を予感させる両義性をもっているところ。(64字)
Schip採点	0点 読解点：0点 構成点：0点 表現点：0点

「遠さや孤独」と「現実を変える力を予感させる」ことの「両義性」が「不思議」であるということ主張は、本文に根拠が見受けられない。構成点は与えられないだろう。また、「遠さや孤独を感じさせること」は「幻」の説明として不適切である。さらに、「幻」が「現実」へと姿を変えるのであり、「幻」が「現実」を変えるのでは無い。以上のことから、読解点も零点である。またそもそも、「両義性」という言葉遣いも気になるところだ。「遠さや孤独」と「現実を変える力を予感させる」ことという二項は「義」なのだろうか？「両面性」だったら納得できるが、「両義性」では表現が不適切だろう。

F社

答案	距離を置かないと見えてこない手の届かない幻の色であり、穏やかな様相を示す一方で、同時に激しく変化する力を内包させているところ。(63字)
Schip採点	0点 読解点：0点 構成点：0点 表現点：0点

A社やB社と同じく、「青は穏やかなのに激しいところが不思議である」と主張する答案である。しかし、A社やB社の解答の講評で解説した通り、穏やかさと激しさの対比は、青の日常との類似点ではあれど、青の不思議さの中核では決して無い。また、B社の答案と同様、「幻」の本質を距離の問題として捉えている点も読解不足である。よって、この答案も、読解点が一点残れば幸運であろう。

設問 (三)

問題	「そういう裏面のある日常」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。
解答例	単調な日常の表面的な維持には、内心の暴発を平常は静止する一方で、その均衡を崩れる直前に潔く刷新することが必要だということ。(63字)

構成フェーズ

- 設問文読解/傍線部読解

読解フェーズ

思考の目次

- 「裏面」とは何か？「裏面」に対応する“表面”は何か？
- 「裏面のある日常」が「季節の乱脈な天候」と相性が良いとはどういうことか？
- 指示語「そういう」は何を指示しているか？修飾対象は「裏面」か「日常」か？

表現フェーズ

構成フェーズ

設問文は「どういうことか、説明せよ。」という形式だ。これ自体はよくある形式なので、傍線部も見てみよう。この段階で挙げるべきポイントは三つある。傍線部の第一のポイントは、最初の指示語「そういう」である。傍線部だけをみる限りでは、「そういう」が「裏面」という語にかかっているのか「日常」という語にかかっているのかはわからない。読解を進める中で検討する必要があるだろう。第二のポイントは、「裏面」が比喩的な表現であることだ。「裏面」があるということは「表面」が前提とされているということであるので、この対比の構図を答案に表現することが求められるだろう。ただし、傍線部が「日常に裏面があること」という言い方ではなく、「裏面のある日常」という言い方であることから、傍線部の力点はどちらかと言えば「裏面」ではなく「日常」にあると考えられるため、答案の着地点も「日常」に合わせることは忘れないようにしたい。第三のポイントは、半ば読解フェーズにまたがることではあるが、傍線部に続く文の内容についてだ。傍線部のある文は、「裏面のある日常」が「季節の乱脈な天候」と相性が良いと述べている。よって、なぜ「日常」は「季節の乱脈な天候」と相性が良いのかを考えなければ、「そういう」や「裏面」と言った言葉の意味は確定しないかもしれない。以上の点を踏まえて、読解フェーズでは以下の問いを総合的に検討していくことにしよう。

- 指示語「そういう」は何を指示しているか？修飾対象は「裏面」か「日常」か？
- 「裏面」とは何か？「裏面」に対応する“表面”は何か？

- ・ 「裏面のある日常」が「季節の乱脈な天候」と相性が良いとはどういうことなのか？

読解フェーズ

まず、「そういう」の中身について検討していこう。「こういう」ではなく「そういう」であるので、ある程度広い範囲を指示していると考えられる。よって、とりあえず傍線部のある第十段落の最初から見てみよう。最初の三つの文である「単調な日々を単調なまま過ごすには、(中略)どこまでも平坦である」からわかるのは、「心」における「単調な日々」と「暴発的なエネルギー」の対比だ。綺麗な対比の構図がありそうなので、記述を出てきた順番でアバウトな等式関係で結んでみる。

- ・ 「単調な日々」＝「外から見た心の動き」＝「表」＝「平坦」
- ・ 「暴発的なエネルギー」＝「自分の心のなかで静かに処分する」＝「表にあらわれでることはない」

わかりやすい動と静の対比構図だ。ただ、最初の文章にあるように、単純な対比関係ではなく、「暴発的なエネルギー」は「単調な日々」を成立させるために必要なものであるという依存関係もあることは注意しなければならない。「万物流転」「諸行無常」といった思想が古今東西にあることを考えると、この考え方は納得感があるだろう。一番難しいのは変わらないことなのである。

続く文章を見てみよう。(A) 「内壁が劣化し全体の均衡を崩す危険性があれば、気づいた瞬間に危ない壁を平然と剥ぎとる」とある。これはどういうことか？（後に参照するために問いに記号をつけた。）「内壁が劣化」した場合に「危ない壁」を剥ぎ取るとされているので、この「内壁」と「壁」は同じものだと考えて良いだろう。では、(A) 「そもそも「壁」とは何のことを指しているか？傍線部の前には手がかりが見つからないので、傍線部の後を見るしかない。傍線部のある文では、(B) 「裏面のある日常」が「季節の乱脈な天候」と相性が良いことが述べられている。これはどういうことか？相性が良いということは、おそらく「日常」と「季節の乱脈な天候」の間に少なからず類似点があるのだろう。その様な目星をつけて、次の第十一段落を見てみる。最初の文に「青空」と結びつける形で「見えるはずのない内側の崩れの兆し」とある。まず「見えるはずのない内側」は「暴発的なエネルギー」と非常に似ていることがわかるだろう。「暴発的なエネルギー」は「自分の心のなか」にあり、「表にあらわれでることはない」ものであった。そこで「見えるはずのない内側」と「暴発的なエネルギー」が同じものだとして考えると、「崩れの兆し」の箇所もまた「内壁」についての記述と似ていることに気づく。「内壁

が劣化し全体の均衡を崩す危険性」とあったことを思い出そう。このことを踏まえると、「見えるはずのない内側の崩れの兆し」と「『暴発的なエネルギー』を隠し持った『日常』の『内壁』の『劣化』の『危険性』」が同じものであることがわかる。

以上のことから、「青空」と「心」がどうやら同じ構図を持っているらしいことがわかるだろう。それを踏まえて、「青空」についての記述（第一段落～第六段落）から、「壁」を視覚的に連想できそうな表現を第十段落に限らず探していくと、第三・第四段落の「破れ目」と第五段落の「感覚の水位」が見つかる。このことから「青空」における「壁」は、晴天と荒天の間を隔てていたものであり、また、筆者がその破れ目を待つことで、「日常」と連続したものとしての「非日常」を「予感」していたものであることがわかる。ここから「心」における「壁」を逆算すると、「暴発的なエネルギー」と対比されているのは「単調な日々」であったのだから、「心」における「壁」は「暴発的なエネルギー」と「単調な日々」の間を隔てるものであることがわかる。これが問い(A')の答えだ。なお、このことは本文全体に関する読解であるので、本文解説で述べた全体イメージを参照してほしい。

元の問いである問い(A)についても考えてみよう。「内壁が劣化し全体の均衡を崩す危険性があれば、気づいた瞬間に危ない壁を平然と剝ぎとる」とはどういうことか？「壁」とは「暴発的なエネルギー」と「単調な日々」を隔てるものなのだから、「全体の均衡」とは「単調な日々」と「暴発的なエネルギー」の均衡、つまりは「心」のバランスのことであることがわかる。だとすると、その均衡が崩れかけた際に、その均衡を保っていた「壁」を一掃してしまうとはどういうことか？一掃してしまうと、むしろ均衡の崩壊は加速してしまうのではないか？これについては、再び第十一段落に手がかりがある。最初の文に「見えるはずのない内側の崩れの兆しを、天地を結ぶ磁界のなかで一挙に中和する」とある。「壁」を一掃した結果起こるのは、崩壊の加速ではなく、「中和」であるのだ。だとすれば、「中和」されるのは、「単調な日々」と「暴発的なエネルギー」だと考えるのが妥当だろう。つまり筆者によれば、「心」の均衡が崩れかけた際には、その均衡を立て直すのではなく、むしろ異質なものを一挙に「中和」させてしまい、新たな均衡を作り出すことが必要なのだ。

このことは、先述の問い(B)の答えにも関連しそうだ。「裏面のある日常」が「季節の乱脈な天候」と相性が良いとはどういうことか、という問いである。「心」には「中和」が必要であり、「中和」には「青空」が必要なのだ。なぜなら、「内側の崩れの兆し」が「見えるはずのない」ものであるからである。「見えるはずのない」からこそ、見える「青空」に投影していたのだ。その意味で、「季節の乱脈な天候」は「裏面のある日常」と相性が良いのである。

ここまでをまとめる。人間の「心」は外面的には「単調な日々」である様に見えるが、実はそれと対照的な「暴発的なエネルギー」によって支えられている。言い換えれば、「暴発的なエネルギー」を静止させ続けることこそが外面的な「単調な日々」の内実なのである（ちなみに「静止」という単語は第九段落の最後の文章で用いられている）。その「単調な日々」（“表面”）と「暴発的なエネルギー」（「裏面」）の間を隔てているのが「壁」であるが、それは時として劣化し崩れて「心」の均衡が崩れてしまう危険性がある。そうした際にはその「壁」をむしろ一挙に剥ぎ取って、「単調な日々」と「暴発的なエネルギー」を「中和」させてしまう必要があるのだ。ただし、「壁」の崩壊は、あくまで外から見えない事柄なので、それを見える世界に投影する必要がある。筆者にとって、それが「青空の急激な変化」、のだ。なぜなら「青空」もまた「壁」を持ち、晴天が荒天が隣り合わせに連続して存在するものだからである。

これで読解フェーズで挙げた問いには答えが見つかった。ここまで来れば、「そういう」という指示語は「日常」にかかっていることがわかる。「裏面」のみが重要なのではなく、「裏面」を含んだ平常の均衡と、その崩壊時の「中和」こそが重要なことから。よって、答案も「日常」を中心に書いてみよう。まずは、一旦本文の言葉をそのまま用いて、答案の骨子を確認する。

「単調な日々を単調なまま過ごすには」、「暴発的なエネルギー」を「裏面」として静止し続ける一方で、「内壁が劣化し、全体の均衡を崩す危険性があれば」、「中和」することが必要だということ。

次に、言い換えを行う。読解フェーズでは字数は気にしない。

単調な日常を表面的に単調であり続けさせるためには、その内側にある暴発を平常は静止し続ける一方で、その均衡が崩れかけた際には、むしろ思い切って静止を止めることで、新たな均衡を作り出すことが必要だということ。（103字）

表現フェーズ

またもや表現フェーズが重要になっている。文章構成を大きく改善できる点はないので、個別の表現を変えるしかない。（変えた箇所に下線を引いている。）

単調な日常を表面的に維持するためには、内心の暴発を平常は静止し続ける一方で、その均衡が崩れる直前に、むしろ潔く静止を止めることで、均衡を刷新することが必要だということ。（86字）

次に、重要度が比較的低い語を省略していく。

単調な日常を表面的に維持するためには、内心の暴発を平常は静止し続ける一方で、その均衡が崩れる直前に、むしろ潔く静止を止めることで、均衡を刷新することが必要だということ。

↓

単調な日常を表面的に維持するためには、潜在的な暴発を平常は静止する一方で、その均衡を崩れる直前には潔く均衡を刷新することが必要だということ。（70字）

最後に、動詞をできるだけ名詞化する。（変えた箇所の下線を引いている。）

単調な日常の表面的な維持には、内心の暴発を平常は静止する一方で、その均衡を崩れる直前には潔く刷新することが必要だということ。（62字）

他社解答例の講評

A社

答案	日常の単調さや穏やかさは、抑圧したまま蓄積した感情の暴発を密かに処理し解消することで成り立っているということ。（55字）
----	--

Schip採点	2点	読解点：0点	構成点：2点	表現点：0点
---------	----	--------	--------	--------

大まかに構成要素は揃っているが、詳細を見ると三つの問題点がある。第一に、「蓄積した」とあるが、「暴発的なエネルギー」は存在はすれど、蓄積しているとする本文の記述は無い。第二に、「暴発的なエネルギー」を「感情の暴発」としているが、本文にはあくまで「心」と述べられているのみであり、本文の「心」を「感情」だとする根拠は乏しい。第三に、「密かに処理し解消する」の箇所に、本文の「均衡を崩す危険性」という要素や、「平然と剥ぎとる」「一挙に中和する」のニュアンスは含めた方が良いだろう。これらの問題点があるため、読解点が二点減点される。

B社

答案	日常には、平坦に持続する表層とは別に、それを支えるために費やされる暴発的な力のひそむ危うい内側があるということ。（57字）
----	---

Schip採点	3点	読解点：1点	構成点：2点	表現点：0点
---------	----	--------	--------	--------

A社と同様、「孤独に処理しなければならない」の箇所、本文の「均衡を崩す危険性」という要素や、「平然と剥ぎとる」「一挙に中和する」のニュアンスを含めた方が良い。この点につき、読解点が減点される。

C社

答案	表面的に平穩に見える日常は、そうした状態を維持するために暴発的な力で内面を更新する、外からは見えない心の動きによって保たれているということ。(70字)
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：0点

「暴発的なエネルギー」は処分（「中和」）される対象であり、その処分の結果、(第十二段落にある)自分の「変貌」が起きるので、「暴発的な力で内面を更新する」は誤読である。よって、読解点が減点される。

D社

答案	心の中で静かに扱われるがゆえに外には現れない暴発的なエネルギーを内に含みつつも、外面的には平穩を装い、時に生じる不穩にも素早く対処して過ごす単調な日々。(76字)
Schip採点	1点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：-1点

「暴発的なエネルギー」が「単調な日々」にとって必要であるという最も重要な点が明言されていない。このことは必要な要素であるだけでなく、最も重要な読解ポイントでもあるので読解点・構成点が共に減点される。また、表現の面では、第一に長すぎるのが問題だ。第二に、「時に生じる不穩」が曖昧すぎることも問題である。おそらく、「平穩」という語と対比させる形で「全体の均衡を崩す危険性」のことを示そうとしたのであろうが、どんな「不穩」なのか説明することこそが重要である。以上から表現点も減点される。

E社

答案	日常が表面的には単調で平坦な時間の連続に見えながら、その裏側に暴発を起こしかねない大きなエネルギーを静かに秘めているということ。(64字)
Schip採点	2点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：0点

「暴発を起こしかねない」ことではなく、それを処分（「中和」）することについて言及しなければならない。「全体の均衡を崩す危険性」について読解されていることも示されていないので、構成点と読解点が共に減点される。

F社

答案	日常は、単調で平坦に見えても生の均衡を突き崩しかねない危険をはらんでおり、平穩を維持するために多大な力が費やされているということ。(65字)
Schip採点	3点 読解点：2点 構成点：1点 表現点：0点

「暴発」の「処分」について述べられていない。よって構成点が減点される。また、表現の面では、「暴発」が「生の均衡を突き崩しかねない危険」と「平穩を維持するための多大な力」に分散して記述されており、あたかも別の概念のように語られてしまっていることは問題である。

設問 (四)

問題	「青の明滅に日常の破れ目を待つという自負と願望があっさり消し去られた」(傍線部エ)とはどういうことか、説明せよ。
解答例	筆者の体験の質を高めていく日常の崩壊と再生の連鎖の一つとして、空の青は赤い風船という異なる非日常により呆気なく消散したということ。(65字)
思考の目次	<p>構成フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 設問文読解/傍線部読解 ・ 変化を起こしたのは何か？ <p>読解フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「赤い風船」はどんな点で「青空」のイメージのと対照的か？他方で、共通点はあるか？ ・ 「赤い風船」は筆者の営みの何を否定したのか？その上で、傍線部の「自負」と「願望」とはそれぞれ何か？ ・ 筆者はなぜ「奇妙な喜び」と「茫然」を感じたのか？ <p>表現フェーズ</p>

構成フェーズ

設問文は「どういうことか、説明せよ」というよくある形だ。傍線部はまず「青の明滅に日常の破れ目を待つという自負と願望」について明らかにすることが求められる。しかし、「自負」と「願望」は全く違う心の動きであるので、それぞれについて注意深く見る必要があるだろう。そして、それらが「あっさり消し去られる」とはどういうことか考察しよう。これは変化について述べているので、理想としては、「AからBに変わった」という構成で回答するのが良いだろう。よって、「あっさり消し去られる」ことによって、どうなったのかも明らかにすることが望ましい。以上より、読解フェーズで考えるべき問いは以下だ。

- ・ 「青の明滅に日常の破れ目を待つ」という「自負」とは何か？
- ・ 「青の明滅に日常の破れ目を待つ」という「願望」とは何か？
- ・ 「自負と願望」が「あっさり消し去られる」とはどういうことか？
- ・ 「自負と願望」が「あっさり消し去られる」ことは何に帰結するか？

読解フェーズ

内容について詳細に検討していこう。多少読解が難解なので、ひとまず設問に回答することは忘れてじっくり本文を読んでいくべきである。まずは「赤い風船」について見てみよう。その色からしてもすぐに「青空」と対比的であることはわかるだろうが、その仔細を丁寧に追うことが必要だ。ここでポイントは三つある。

一つ目は、その動きのリズムである。「赤い風船」は「ふわりふわりと」「一段一段弾むように」「おなじリズム」で動いているのである。「青空」は急変するものであった。ここに第一の対比がある。

続く二つ目のポイントは、「天を目指さず」「降りて行く」ことだ。「青空」のイメージでは、「非日常」の体験を通じて「日常の感覚の水位が上がる」ものだった。上下の対立がここにある。そして空自体までが「地上へと引き戻される」のである。ただここで少し注意して欲しい。「赤い風船」は、「青空」自体と、「青空」を見つめる筆者の二つと同時に対照されている。先ほど述べた通り、「赤い風船」は「青空」と対比的な色、そして対比的な動きのリズムを持っていたわけだが、同時に「人の頭ほどの赤い生きもの」でもあるのである。そして、「貴重な青」と「こちらの視線」は「いっしょに地上へと引き戻される」のだ。以上の二つのポイントを整理した。

赤い風船	青空
赤という色	青という色

赤い風船	青空
坦々/泰然と動いている	急変する
「天を目指さない」「降りて行く」 「人の頭ほどの赤い生きもの」	「貴重な青」と筆者の「視線」がともに 「地上へと引き戻される」

だがここで——これが三つめのポイントだが——「赤い風船」は「青空」と対比的であるだけではないことに気づいて欲しい。風船とは通常は上昇していくものではなかろうか。「飛翔の力を失った赤い風船」。「力を失った」ということは、その力は元々はあったということだ。これは風船にとっての異常なのであり、つまりところこの「赤い風船」自体がまた新たな「非日常」なのだ。

このことを踏まえると、「青の明滅に日常の破れ目を待つという自負と願望があっさり消し去られる」ことについても、幾分か輪郭がはっきりしてくるのではなかろうか。「赤い風船」によって消し去られたものは何か？「小さな変貌の断続的な繰り返し体験の質を高め、(中略)べつの出来事を呼び寄せる」ものであったこと、そして本文の最後が「再び失われた青の行方を告げるように、遠く、雷鳴が響いていた。」と締めくくられていることを考えると、筆者のこの「破れ目を縫い直したあとでまた破るような」営みのサイクル自体が失われたしまったとは考え難い。だとすれば、「赤い風船」それ自体が新たな「非日常」であるのだから、「赤い風船」はこの営みのサイクルを新たなサイクルへと刷新した、と考えるのが妥当であろう。「青空の明滅」に対する自己の内面の投影は終われども、このような「日常」の崩壊と再生のサイクルは続いていくのである。

だとすれば、「青の明滅に日常の破れ目を待つという自負と願望があっさり消し去られる」における「自負」と「願望」とは何だろうか？

「願望」はわかりやすいだろう。平穏な日常に欠かせない自己の暴発的な内面は、それ自体見えないものだからこそ、どこかに投影する必要があったのだ。

では、「自負」とはどういうことか？「自負」という言葉が用いられているということは、他者の営みを考慮に入れる必要があるということだ。自負は他者と対比したの中で初めて成立するものだからである。本文の中で他者の営みについて言及があったとすれば、最初の話題である「青空」における「予報」についての記述が思い出される。「晴れわたった青空のもと街を歩いていて、すれちがいざま、これから降るらしいよといった会話を耳に挟んだりすると、何かひどく損をした気さえる」。これが普通の人の営みである。しかし筆者は「しばらくのあいだ青を失っていた空の回復を、私は待つ。崩れから回復までの流れを、予知や予報を介在させず、

日々の延長のなかでとらえてみようとする」のであった。つまり、筆者は、青空という対象について、その日常と非日常の交差を感じ取ることができる、その営みを体現することができるということに自負があったことが窺える。

だとすれば、そうした営みの対象として依存していた「青空」が消え去ってしまったことは、衝撃的であるはずだ。これこそがきっと「茫然」の正体なのだろう。だが一方で、こうした営みを恒久のものとしていくためには、「赤い風船」というまた異質な「非日常」の出現は歓迎すべきことでもある。こうした「変貌の断続的な繰り返しが体験の質を高め」るのだ。「奇妙な喜び」とは言い得て妙である。

さて、これらを踏まえると、解答としては、大きく二つの部分に分けて記述すると良さそうだ。一つは、<自負と願望が消し去されたこと>、もう一つが、<営みのサイクルが続いていくこと>である。そして、あえて大まかに言えば、前者は「茫然」であり、後者は「奇妙な喜び」なのであるから、これらのニュアンスも行かせたら尚良い。一旦、字数を気にせず書いてみよう。

筆者は、青空の急変と回復の中に自己の内面の暴発を見出していたが、坦々と歩道橋を下降する赤い風船という新たな非日常が突如出現したことにより、依存していた青空のイメージは呆気なく雲散霧消してしまった。しかし、こうした日常の崩壊と非日常から再生の連鎖を通じてこそ、筆者は体験へ質を高め続けることができるのだということ。(153字)

ただし、ここで傍線部に立ち返って注意しなければならないことがある。傍線部はあくまで「消えた」ことが中心にあるので、理想的には連鎖の継続ではなく「消えた」ことを解答の中心にも据えるべきだ。この点を踏まえつつ表現フェーズに移ろう。

表現フェーズ

あまりに長いので、大胆な改革が必要であるようだ。泣く泣く、重要度の低い単語を一掃してみよう。

筆者は、青空の急変と回復の中に自己の内面の暴発を見出していたが、坦々と歩道橋を下降する赤い風船という異なる非日常が突如出現したことにより、依存していた青空のイメージは呆気なく雲散霧消してしまった。しかし、こうした日常の崩壊と非日常から再生の連鎖を通じてこそ、筆者は体験へ質を高め続けることができるのだということ。

↓

筆者は、青空の急変に内面の暴発を見出していたが、赤い風船という異なる非日常により、青空のイメージは呆気なく雲散霧消してしまった。しかし、こうした日常の崩壊と再生の連鎖を通じてこそ、筆者は体験の質を高め続けるのだということ。
(111字)

まだ長い。まずはできるだけ意味を保存したまま単語を短くする。また、前半の主題は実は「青空」であるので、それを主語にしてしまい、筆者の営みの説明はこれまた泣く泣く削る事にした。

空の青は赤い風船という異なる非日常により呆気なく消散した。しかし、斯様な日常の崩壊と再生の連鎖を通じてこそ、筆者は体験の質を高め続けるのだということ。
(75字)

ここで、先ほどの注意点を踏まえて、前半と後半の順番を入れ替えよう。

筆者は体験の質を高め続ける日常の崩壊と再生の連鎖の新たな局面を迎えるべく、空の青は赤い風船という異なる非日常により呆気なく消散したということ。(71字)

まだ多少長いので、苦肉の作として、前半をより削って解答例としている。

他社解答例の講評

A社

答案	青空の急激な崩れという非日常を歓迎したいという勇んだ気分が、小さな赤い風船によってしぼんでしまったということ。(55字)
----	--

Schip採点	2点	読解点：1点	構成点：1点	表現点：0点
---------	----	--------	--------	--------

「青空の急激な崩れという非日常を歓迎したい」という前半部はあまりに曖昧である。せめて「なぜ歓迎するか」について一言言及して欲しかった。むしろ傍線部の「青の明滅に日常の破れ目を待つ」という文言の方が本文の内容についての情報量が多い。次に、この解答のポイントはきっと「風船」という物体の「膨らんでいる」というイメージの転用で「気分がしぼんだ」という解釈が成り立つ、という点なのだろうが、本文にその解釈を支持する根拠は見当たらない。

B社

答案	遠い青空の非日常に自己の救いを求める思いが、地上の赤い風船という別の非日常との遭遇によって快く否定されたということ。 (58字)
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：0点

赤い風船は「別の非日常」であるという点は同意できる。しかし、「思いが否定された」だけでは、筆者の営みのどこが否定されたかが曖昧なままだ。また、「快く」だけでは何も感情の説明になっていない。なぜ否定が「快く」もあったのか。それらが曖昧なまま回答されているため、読解点を減点した。

C社

答案	青い空の崩れと回復に呼応する、絶えざる自己刷新への確信や期待が、降下していく風船の赤に目を奪われることで、もろくも失われてしまったということ。(71字)
Schip採点	1点 読解点：0点 構成点：1点 表現点：0点

自己刷新自体への確信や期待は失われていないと考えるのが妥当だろう。自己刷新自体は「べつの出来事」においても続いていくのである。自己刷新自体への確信や期待を失わせてしまったことから、「奇妙な喜び」の説明もできていない。それまでの信ずるものや期待していたものが一掃されて何が喜ばしく思えるのだろうか？「自負」について述べようとはしているが、自負であるからには「確信」という言葉よりは「自信」という言葉が適当であろう。

D社

答案	心の暴発を秘めた日常を夏の不安定な天候に重ね、新たな出来事を呼び起こす天空の青の急激な変化への待望が、突然に地に降りた風船の異質な赤によって消えたということ。(79字)
Schip採点	1点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：-1点

長すぎる。かつ読みにくい。最初の句読点までの節と次の動詞節が「待望」という名詞にかかっているのだろうが、かなりわかりづらい。これでは、「暴発」を空に重ね合わせたり新たな出来事を呼び起こすのが、筆者の青の明滅に対する感性や営みではなく、「待望」自体であるように見える。それはおかしいだろう。また、「心の暴発」という言い方も気になる。単に広く「心」ではなく、その内面性が問題となっているのであった。また、「待望」が消えたというだけでは、この答案も、筆者の営みのどこが否定されたかについて曖昧性を残してしまっている。

E社

答案	平凡な日常を思わせる空の青の中に突然の非日常の訪れを待つ高揚した気分が、視線を現実を誘う赤い風船によって急速に失われたということ。(65字)
Schip採点	2点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：0点

この答案は、赤い風船によって「高揚した気分」が「現実」に引き戻されたと主張している。つまり、青の明滅に自己の内面を重ね合わせる営みはいわば「現実離れしていた」「浮き立っていた」ということであるが、これについて本文から明確な根拠は見出せない。また、「自負と願望」が一言で「高揚した気分」に置き換えられてしまうのはあまりに乱暴だ。「奇妙な喜び」についても説明しようとしている気配はない。

F社

答案	青空の崩れと回復に非日常と日常性の回復を重ね見て、世界が改まったことを確信する思いが、別の非日常に出会うことで打ち消されたということ。(68字)
Schip採点	2点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：0点

「世界が改まる」とは何のことを指しているのか不明瞭だ。また、「奇妙な喜び」についての説明もない。

※他社解答例の採点結果（最高点は20点）

	A社	B社	C社	D社	E社
設問1	4点	2点	3点	3点	2点
設問2	0点	0点	0点	0点	0点
設問3	2点	3点	3点	1点	2点
設問4	2点	3点	1点	1点	2点
合計	8点	8点	7点	5点	6点
得点率(%)	40%	40%	35%	25%	30%

最後に

以上のように各社の模範回答を見てきたが、模範回答が十分信頼に足るものではないことが理解できたのではないだろうか？

それはもちろん我々の回答についても言えることである。回答は常に暫定的なものである。大事なことは、自らが納得した回答を作ることである。その際には、文章中にしっかりと根拠を見つけ出すことを忘れないようにしよう。

文章をどのように読み解くか、書いてあることをどう解釈するかは、人によって差が出る。実際に、我々が回答を作る際にも解釈で揺れた箇所も沢山ある。しかしながら、一人一人の勝手な判断や思い込みを極力避けるために、与えられた文章を丹念に読み込んだ上での解釈である。

解釈の多様性は保証されるべきであるが、その解釈は共通の基盤あってこそ一人一人の解釈である。

しかしながらそのような訓練を学校ではあまり受けていないであろうから、この解説を案内としつつ、もう一度現場に立ち返ってほしい。

そして現場からくみとれるものをきちんとくみ取る訓練をすれば確実に回答作成力は上がると思われる。

やみくもに演習するのではなく、問題に徹底的に向き合って自分で納得した回答を作るように心がけてほしい。

その際には、議論することも大事である。議論することによって、このような解釈もありうるのではないか、これはこう読むのがだろうかのではないかというように、テキストの多様な側面が見えてくる。自分では思いもよらなかった解釈に出会うこともある。現代文の回答を議論することはあまりないかもしれないが、これはかなり学びになる。そして何よりも楽しい。是非一度、自分の回答をみんなで議論してみてください。学ぶこと、頭を使うことで最も重要なことは楽しむことである。勉強は楽しみながらするのが一番である。

模範回答があてにならないことは、既に分かったのだから、我々の回答も疑いつつ、さらによい答案を皆さんが書いてくれることを楽しみにしている。もし自信のある答案がかけたならばぜひ教えてほしい。

このAnchorが皆さんのフィードバックによって、より良いものに更新されて行くことを期待して、終わりとする。

引用文献・著作権表示

本PDFファイルの著作権及び著作者人格権は、全て任意団体Schipに帰属します。

無許可での本PDFファイルの複製と再配布は、これらを全て禁じます。

他社解答例の講評欄で言及している解答例は以下の出典より引用しております。

- 『2017年版大学入試シリーズ東京大学（文科）』 教学社編集部・編 2016年
- 『大学入試完全対策シリーズ 2017・駿台 東京大学 [文科] 前期日程(上) 2016～2012/5か年』 駿台予備学校・編 2016年
- 河合塾（総合教育機関・予備校） / 2016年度国公立大二次試験・私立大入試解答速報 <http://kaisoku.kawai-juku.ac.jp/nyushi/honshi/16/t01.html>（閲覧日：2017年2月18日）
- 大学入試問題過去問データベース produced by 東進 <http://220.213.237.148/univsrch/ex/menu/index.html>（閲覧日：2017年2月18日）
- 代々木ゼミナール（予備校） | 東京大学 前期日程の入試問題と解答例（2016年解答速報） http://sokuho.yozemi.ac.jp/sokuho/mondaitokaitou/1/kaitou/kaitou/1268941_4422.html（閲覧日：2017年2月18日）
- 東京大学 教育学部の無料受験過去問/入試問題集【スタディサプリー】 <https://studysapuri.jp/SC000073/kakomon/00000000000132501>（閲覧日：2017年2月18日）